

博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

乙第19号

2008

創価大学

本号は学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条の規程による公表を目的として、平成21年3月21日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した乙は、学位規則第4条2項(いわゆる論文博士)によるものである。

創価大学

氏名（本籍）	大黒 正伸（愛知県）
学位の種類	博士（社会学）
学位記番号	乙第19号
学位授与の日付	平成21年3月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当 創価大学大学院学則第17条第5項 創価大学学位規則第3条の3第4項該当
論文題目	パーソンズ社会理論の方法的構想力 — 一般理論から「媒介」の理論へ —
論文審査機関	文学研究科委員会
論文審査委員	主査 中野 毅 文学研究科教授 委員 松本 和良 創価大学名誉教授 委員 大梶 俊夫 文学研究科教授

2009年1月10日

博士論文審査および最終試験報告書（論文博士）

主査 中野 毅 文学部教授
委員 松本 和良 創価大学名誉教授
委員 大槻 俊夫 文学部教授

博士（社会学）学位請求論文提出者

氏名 大黒 正伸（おおぐろ まさのぶ）（男）

生年月日 1956年 4月 9日（52歳）

論文題目

パーソンズ社会理論の方法的構想力

— 一般理論から「媒介」の理論へ —

1. 論文内容の要旨

本論文は、学位請求者の長年にわたるタルコット・パーソンズ研究の成果をもとに、表題の課題について展開したものであり、全体の目次は以下のようになっている。

序章 本論文の視点と目標

第1部 パーソンズ社会理論の方法原理

第1章 社会学理論の方法的次元とパーソンズ

第2章 パーソンズ理論における「収斂」の意義—行為準拠枠をめぐって

第3章 相互浸透のメタ理論—行為準拠枠から行為システムへ

第4章 第一小括—中間考察とパーソンズ方法論の再構成

第2部 パーソンズ社会理論における多元的媒介—AGIL図式の構想力

第5章 パーソンズ社会理論の中核—AGIL図式の構成と変遷

第6章 社会統合の市場モデル—影響力概念とAGIL生産モデルの可能性

第7章 政治権力のシステム理論—通貨モデルの諸問題

第8章 パーソンズ社会理論の多元的モデル化—生産モデルの諸問題

第9章 第二小括—中間考察と生産モデルの改訂

第3部 物語と方法の媒介—「プログラム・モデル」の可能性

第10章 象徴メディア論の課題—パーソンズ理論における貨幣と言語

第11章 行為システムと無意識

—行為のプログラム・モデルとデュルケム/フロイト収斂

第12章 行為システムとしての宗教—宗教シンボリズムの媒介的機能

第13章 第三小括—中間考察とプログラム・モデルの課題

終章 総括—方法としてのパーソンズ理論

参考文献一覧

<内容要旨>

本論文は、20世紀アメリカの社会学者タルコット・パーソンズ(Talcott Parsons, 1902-1979)の理論構築の「方法(Methods)」を改めて提示し、その変遷と課題を明らかにするとともに、将来にわたる有効な社会理論としての可能性を探求しようとした意欲的な研究である。大方の社会学史的な記述においては、パーソンズらの機能主義理論が一時社会学の世界を席卷したが、その地位と影響力が失墜したあとは社会学全体と社会学全体を視野に収める学派が長く不在だった。本論文は、社会学における一般理論の可能性を追究したパーソンズの試みを今日いかに継承し発展させることができるかという問題意識に導かれている。

本論文の第1部では、パーソンズの社会研究の背後にあるメタ理論的次元（存在論、認識論、科学方法論）を検討している。パーソンズの理論構築は、分析的科学の方法によっている。彼の認識論は、科学的な概念構成が「虚構」ではなく、実在の一定の局面を把握できるという信念に基礎づけられている。その原理を、パーソンズは「分析的実在論」と名づけた。

パーソンズの方法論は、高度に抽象的な一般理論への志向という性質を持っていた。それは、「収斂(convergence)」と「相互浸透(interpenetration)」という語で表現される。収斂とは、社会学に隣接する多様な学科の知見を総合し媒介するという知の運動を指している。パーソンズは第二次大戦以後、多元的で分析的なシステム理論の構想を示した。彼は、分化したシステムどうしが相互浸透するという観念によって、一種の「システム存在論」を暗示している。それは、アルフレッド・N・ホワイトヘッドの「有機体哲学」に影響を受けている。パーソンズは、秩序への直観を表明しながらも、あくまで分析的な科学を追究した。直観と科学を媒介する構成物を、本論文では「メタ・モデル」と呼ぶ。メタ・モデルは、具体的な研究成果と隣接学科からのアナロジーによって「書き加え」られ、「実体モデル」へと精緻化されていった。そうした「書き込み」は、パーソンズ自身によって、判例法の上訴手続にたとえられる。

本論文の第2部では、AGIL図式と呼ばれるパーソンズ独特の理論範型(formats)を検討した。AGILの変遷と多元的な構成とを検討するなかで、その論理的問題を指摘し、一定の改訂案の提出にも努めている。AGILの問題は、下位システム分化の構成とシステム間の相互交換にあった。相互交換は、象徴的なメディアによって推進される。各人の相互作用は、共有された規範とともに、メディアの機能によってリスクと成果が制御される。社会システムにおいては、たとえば政治的決定について「権力」が、連帯的な行為について「影響力」が考案された。ただ、パーソンズはこうした相互作用の媒介を、言語よりむしろ貨幣に範をとって概念化しようとした。筆者は、こうした経済交換のアナロジーとも言うべきパーソンズの範型を、「生産モデル」と名づけた。

「生産モデル」は合理的な行為選択を基準とするものだが、社会システムの動態について一定の説明力を期待できる。本論文では、影響力を貨幣になぞらえ、連帯的諸活動を財になぞらえて、需要/供給曲線を描くというヴィクター・リッツの解釈を、「財の弾力性」と「市場の外部性」とを鍵としてさらに展開を期している。また、象徴的メディアとしての権力という観念は、複合性の高い政治社会現象の分析にとって重要な意義を持つが、パーソンズは、権力を特定の個人や階層に一義的に帰属しない社会の特性と考えた。本論文は、ニクラス・ルーマンのコード・モデルとの対質をつうじて、権力の集

合的な特性と政治システムの自立的な特質にも言及した。ただ、下位システムの極端な独立性を強調するルーマンに対して、筆者は正統化を含むシステムの共通コードを想定したパーソンズに同意している。

筆者はAGIL生産モデルの個別領域だけでなく、AGILの全体範型の改訂にも言及した。マーク・グールドとリヒャルト・ミュンヒの議論に注目し、システムの機能分化の原則を改訂した。各下位システムに固有の中核部門と作動コードを想定し、ニクラス・ルーマンが提起したシステムの自立的作動を視野に収めようとした。

第3部では、(誤謬や単なる無知ではない)「没合理的(non-rational)」な行為世界をモデル化する可能性を後期・晩期パーソンズに求めた。そこにおいては、合理的で「集計的」な「生産モデル」を超えて、人間の社会-文化的な現実における「集合的」なあり方を理論化する可能性に目を向けた。筆者は、AGILに「プログラム・モデル」と呼ぶべき側面があると考え。それは、サイバネティクス情報学から言語学、分子遺伝学にいたる極めて広範な学知の「収斂」から導きだされた。そもそも、パーソンズの象徴的メディアは、貨幣と言語という2つの象徴的実体をモデルにしていた。しかし、パーソンズのメディア理論は貨幣アナロジーを偏重し、行為理論そのものにも語用論的な過程分析の軽視がうかがわれる。

パーソンズは、行為の没合理性に個人的な内面世界と社会的・集合的な世界とを媒介させる機能を見出した。個人についてはフロイトが、社会についてはデュルケムがそれぞれ重要な貢献を為した。パーソンズは両者を総合することによって、個人と社会の葛藤について洞察を深めている。それは、行為の「二元的」な究極的環境というアイデアをはらんでいる。すなわち、行為の没合理的な志向は、超越論的な存在や集合性すなわち「非意識の原理」(ピエール・ブルデュー)を特性とする環境に志向すると同時に、性的無意識などの心身論的な環境にも志向する。行為システムには、二重のプログラムが存在する。

本論文はさらに、「プログラム・モデル」の経験的な適用例として宗教に焦点をあて、パーソンズの社会理論が人間の実存的世界に対する洞察に基づいていることを示した。その中核要素は、宗教のシンボリズムである。その機能は、キリスト教にも、また宗教ならざるマルクス主義イデオロギーにも観察される。彼は、「悪」に対する二律背反的な態度をキリスト教とマルクス主義の歴史に見出し、原理主義を回避するリベラルな思想展開の原理を探究する。パーソンズは徹底した近代主義者としての側面を持っている。ただ、パーソンズの近代主義は、道具的な合理主義を相対化するものである。それは、キリスト教に対する歴史社会学的な洞察に基礎を持っている。彼の近代社会観は、エキュメニズム(世界教会主義)とリベラルな宗教的寛容を強調し、社会の人間主義的な発展を展望していた。

最後に本論文は、以上のような特徴を持つパーソンズの方法論と理論範型に対して、試論的ながら若干の改訂を提案している。それは、方法論と行為理論、AGILのモデル化、そして学際的な志向という4つの論点にわたっている。方法論については、分析的事実論の修正を図った。筆者は、パーソンズの実在論的なシステム存在論を括弧に入れ、留保した。パーソンズのモデルに一定の「虚構性」を付与し、「書き換え」や「書き加え」に開かれたものにした。本論文は科学を一種の「漸近運動」として捉え、用具としての分析概念という側面を強調する。

行為理論については、理解公準の限定と集合化を主張する。パーソンズは、行為の有意性と創造性を決して否定しないが、最後まで分析的な理論構成を維持した。行為に対する文化的・規範的な解釈を強調することで、行為の意味問題に集合的な観点を導入した。

AGILの改訂では、まず社会システム水準における集計的で合理的な範型の徹底を図った。市場に「外部」があるように、システムには「環境」がある。「生産物」としての多様な社会的行為を各下位システムが評価し調達し制御するという「市場」のアナロジーによって、社会システムの分析的な像を描き出そうとした。

晩年にパーソンズは、具体的な社会を概念化し分析する範型を社会システムから一般行為システムへと移動させたように思われる。社会システムの「上位」に想定された一般行為システムには、生産モデルが適用しにくいと判断される。本論文は、上位システムと下位システムの関係に「プログラム・モデル」を適用しようとした。パーソンズ自身によって、それは最終的には社会進化論という全体社会の長期的かつ非循環的な変動の解明へと向かうよう要請されていた。パーソンズは進化論の対象である「全体社会」として自足的な社会システムの類型を想定していたが、その自足性の指標は曖昧である。本論文は、生物学的アナロジーの強い社会進化論については、態度を保留した。

パーソンズの社会理論の方法は、多様な学科を横断する可能性を持っている。それは、生物学から人文学にまでいたる広範な射程を持つ。しかし、パーソンズによるモデル化は未完成に終わり、生産モデルとプログラム・モデルとの連携が詳細に為されたとは言えない。社会システムについては生産モデル中心の限定的な用途を、また有意味で人間学的な理論構築については行為システムにおけるプログラム・モデルを探究する道を推奨している。本論文はまた、類型学と統計的モデル化というパーソンズが積極的には展開しなかった方向も示唆している。

本論文において大黒氏は、パーソンズの理論は、社会学の古典大家としての地位を確立してはいるが、社会科学的方法として見直されるべきであり、パーソンズの理論がむしろ未来に開かれていることを示そうとしている。

2. 論文審査の要旨

審査委員は、本論文を精読し、以下のように評価した。

(1) 本論文は理解の困難で難解な叙述もあるが、執筆者の多年にわたる研究にもとづく力作である。大黒氏の修士課程以降の論文および著作活動をみると、社会学の学究として一貫してパーソンズの社会理論に惹かれ、終始、批判的摂取を心掛けてきた真摯な若手研究者の一人であつたことが分かる。修士論文においては、「初期パーソンズの問題意識とその意義——初期パーソンズの全体像と代替的展開の可能性を求めて——」(1983年)と題して論じたが、パーソンズの『社会的行為の構造』(1987年)とそれ以前の業績に関心を寄せた理論社会学の研究から始めている。大黒氏はすでに、この段階からパーソンズ社会理論のなかに、方法論的な実証主義と理念主義の総合を目指す「収斂テーゼ」を見出しており、その分析図式に注目して、パーソンズ理論を分析図式的に把握して整序する方法を探ってきており、それが本論文の『媒介』の理論となって結実を見たといえる。

大黒氏は、とくに生産モデルとプログラム・モデルという概念用具を使い、パーソンズ社会理論を再解釈して、その理論が社会システム論から一般行為システム論へ進化を遂げたことを確認した。「収斂テーゼ」の考察は精緻で深層的であり、生産モデルとプログラム・モデルの類別は巧妙で的確であって、パーソンズ理論の不備を補って、自らの論述を徹底させている。

(2) 本論文は、20世紀の社会学理論を大きく発展させ、社会システム論のみでなく一般行為システム論として諸学を総合して人間個人および人間集団の複合的行為システムを総合かつ体系的に解明しようとしたタルコット・パーソンズの社会理論を、長年にわたる地道な探求と関連研究の緻密な精査の上に、その理論的全体像と課題、現代における新たな可能性を明示する優れた研究である。論文全体の構成は、パーソンズの存在論や認識論、科学的方法論に關係するメタ理論的次元の切開(第1部)、パーソンズ独特の理論範型であるAGIL図式の変遷と多面的な構成を明らかにして「生産モデル」とも呼びうる特性の解明(第2部)、パーソンズ後期に顕著となる文化システムへの関心、さらに社会システムを越える「行為システム」や「人間的条件」論の展開を通して明らかになる「プログラム科学」としての側面を「プログラム・モデル」として析出し、前述のAGIL図式にもその側面があることを明らかにするとともに、プログラム・モデルの事例としてパーソンズの宗教やマルクス主義についての分析を紹介(第3部)、パーソンズ理論の改訂のための試論(終章)となっている。このように大黒氏自身の立論も極めて体系的である共に、パーソンズの初期から後期に至る主要な関心と理論の変遷・進展を明らかにすることによって、パーソンズの新たな全体像を描き、さらに彼の理論を現代に再生するための独自の改訂作業を施すなど、意欲的な研究である。

特に、パーソンズの理論を行為システムについての一般理論と捉えるのではなく「諸学の理論を媒介させる」方法論として把握すべきという論点、AGIL図式には従来の理解を超えた「プログラム・モデル」的側面があること、さらにキリスト教やマルクス主義の有する宗教的シンボリズムの機能分析を通して、プログラム科学としての理論的展開を見いだしている点に、大黒氏の研究の独自性と重要性を高く評価する。

(3) 大黒正伸氏の博士学位請求論文は、現代の理論社会学を代表するT・パーソンズの理論体系を真正面から取り上げ、内外の主要な関連先行研究を幅広く参照しながら、パーソンズ理論の方法的基礎を内在的に明らかにするとともに、その代表的な理論図式であるAGIL図式に対して大黒氏独自の修正版を提起するなど、精緻な論議と分析を積み重ねた第一級の研究成果である。特に、パーソンズの理論を閉ざされた一般理論として把握するのではなく、パーソンズ自身の理論的歩みがそうであったように、未来に開かれた発展可能な理論として再構築しようとする氏の試みは、これからの社会学理論の地平を拓くものとして大いに評価されるべきである。パーソンズ理論を足場に、社会学理論の新たな可能性を切り開いた業績であり、その緻密な議論と独創性は博士論文としての資格を十二分に保持しているといえる。

(課題)

大部の論考だけにいくつか課題と疑問点が見られる。

(1) 「メタ理論」「集計的」「集合的」、また「プログラム・モデル」などの重要な術語につ

いての概念定義や説明が必ずしも十分と言えず、そのため、氏の主張が不明確になっている箇所も見られる。用語にも章によって不統一と見られるものがある。

(2) パーソンズ理論についての先行研究・関連研究を極めて幅広く精査している点は賞賛に値する。しかし、それら個々の研究に対する批判的検討や評価が本論文中では不十分であり、そのため上記(1)に指摘されたような、諸概念の流用や活用が安易になされることにもなつたと考えられる。

(3) 副題および第1部における主要な概念である、「媒介」概念と「収斂」概念、「相互浸透」概念の定義および相互の位置づけをさらに明確にする必要がある。これらは方法的な基礎として重要なだけになおさらである。副題においても、パーソンズ理論を実体分析のための一般理論としてより、方法的「媒介」理論として再解釈すべきという論者の見解を明示する表現が望ましい。

(4) 第2部におけるAGIL図式の独自の改訂の意義が必ずしも明らかではなく、説明も不十分なように思われる。

(5) 第3部においては、パーソンズ理論を「プログラム・モデル」として捉える視点は重要かつ独自なものとして評価できるが、全般の論究が不足していて、「生産モデル」ではない「プログラム・モデル」の具体的な可能性を、より明確に示した方がよいと思われる。

(6) パーソンズの最後期に強調されている「人間的条件」のうち、宗教的シンボリズムの分析から導き出された「超越論的環境」は実体または実在の世界ではない。それを自然的物理的環境と同等に置くのは、パーソンズ自身のキリスト教的世界観の反映とも言える。このような点を相対化し、より批判的に検討しなければ社会理論としての統一性、一貫性が不十分になると思われる。

3. 最終試験の結果

本論文執筆者は1979年3月に創価大学文学部社会学科を卒業後、同年4月に創価大学大学院文学研究科社会学専攻博士前期課程に入学し、1984年4月に同専攻博士後期課程に進学、1990年3月に同課程を単位取得満期退学している。その後、本学及び他大学において社会学理論や外書講読などの講義を担当し、学力および外国語の能力は十分に有する。

最終試験では上記の諸点が指摘されたが、妥当かつ真摯な回答を行った。本論文自体の課題や今後の研究方向についても意欲的かつ適切な自覚をもっている。本論文が全体としては独創性に富み、パーソンズ研究の第一級レベルの極めて優れた業績であると評価された。

本論文は博士(社会学)の学位を授与するに値するものと認定する。